

2012年10月1日

2012年7月 377号 及び 8月 378号

まず7月分 (Nr. 377) ですが、日本のように中央集権的国家とは異なり、地方分権が発達したドイツにおいても、地方都市が州や国家と権限の問題があるのですね。

次に8月分 (Nr. 378) においては、組織のいわゆる内部告発がテーマですが、同様の問題が日本においても時折発生し、マスコミを賑わせることがあります。今回は養護施設や公務員などが例として取り上げられていますが、正に日本においても同様です。

K. K.

2012年11月4日

2012年9月 379号

今回の課題において die Sächsische Schweiz という表現が出てきますが、日本語にもこれと似た表現があります。例えば、「東洋のスイス」と言う表現ですが、これは長野県諏訪地方を指します。この地方は、スイス同様時計製造などの精密工業が盛んで、かつスイスのように山と湖があり、空気がきれいでまるでスイスのように言われているためです。この表現が、日本語において独自に発達した表現なのか、ドイツ語または英語からの翻訳から生じたものかわかりませんが、興味深いことです。

ドイツは、多くの日本人にとって、「シュヴァルツヴァルトの森」に代表されるように「豊かな森」の国というイメージがあると思いますが、それには大きな努力がなされているわけですね。特に旧東ドイツでは環境保護がなおざりにされてきたためそのつけを現在も払っているという印象を持ちました。かつては豊富に生息していた動物や豊富に存在していた植物がいつのまにか絶滅の危機に瀕しているということは最近の日本も発生しており、先日のニュースでも報道されていました。

K. K.

2012年11月13日

2012年10月 380号

今月は、共有地の利用がテーマですが、プレーメンにおいて熱心な住民の運動のおかげで、固有地がいろいろな施設を備えた広大な市民自然公園に生まれ変わったと言う事例が紹介されています。この運動が今から100年以上も前に行われたということにとっても驚きました。それだけ住民の意識が高かったのだと思います。

旧東ドイツには私有地が少なかったということですが、ドイツ統一後、国が保有していた一般の土地が、誰に対してどのように売却されたか興味があるところです。

今回出てきた、„naturnah“の „,_‘nah“という表現は便利だと思いました。たまたま本日、特に旧東ドイツ地域で„Rechtsextremismus“が増えているという調査結果が発表された旨の ZDF のニュースを聞きましたが、その調査を行ったのが、die SPD-nahe Friedrich-Ebert-Stiftung とのことでした。このような表現にも使用できるのですね。今度は是非自分でも使ってみたい表現の一つだと思いました。また、今回課題の „parkähnlich“の „,_‘ähnlich“も同様の表現かと思いますが、このような表現は、自分で読んだり、聞いたりした際には理解できるのですが、なかなか自分で話したり、書いたりする時には使えませんでした。今後はちょっと意識してみたいと思います。

K. K.

2012年12月21日

2012年11月 381号

今回のテーマは、ドイツの政治家の *Korruption* ですが、似た事例は日本でもあります。この問題は、以前はマスコミの大きな話題となっておりましたが、現在は時折話題になる程度であると感じます。やはり利益誘導型の政治家が以前より少なくなってきたからだと思います。

今回の放送の中で Köln は *Korruption* で有名であると紹介されていますが、最近の *Deutsche Welle* の放送の中では Köln が *Vetternwirtschaft* でも知られていると報じられていました。両方とも不名誉な烙印ですが、特定の間が受けることができる利益と言う点で関連性が感じられます。

Korruption とはいえないでしょうけれども、「政治家と金」の問題という点では、不正献金があります。この問題は、10月頃ゲーテの授業でコール元首相の光（業績）と影（スキャンダル）について話題になった際に、取り扱いました。彼がこの問題について真相を最後まで明らかにせず、ドイツ再統一を成し遂げた自分の経歴に汚点となりました。そしてこの問題が理由のひとつとなり、毎年ノーベル賞候補に挙がっているながら、受賞を逃したとも言われているようですが、それほどまでに沈黙を守った理由は何だったのでしょうか。昨日のニュースで、ノーベル平和賞を共同受賞した EU のロンパイ大統領が *Oggersheim* にコール元首相を訪ねて、ノーベル平和賞の賞状のコピーを渡している画像を見ましたが、コール元首相はどう感じたのでしょうか。

K. K.

2013 年 2 月 25 日

2012 年 12 月 382 号 及び 2013 年 1 月 383 号

12 月課題では、ベルリンとミュンヘン間の鉄道建設が話題になっていますが、公共施設の工事ということで思い出すのは、最近のニュースでも話題になっております新ベルリン空港の建設工事です。私の従来のイメージでは、何かを実施する場合、ドイツでは最初にしっかり計画を立てて、その計画通り実行するという印象がありますが、この空港に関しては、トラブル(最新の報道では排煙装置の不備)のために何回も延期され、何と 2024 年どころか、2015 年になる見込みというのですから、ドイツらしくないと思います。もっとも、ハンブルクの音楽ホール建設に際しても類似のトラブルのため、オープンが遅れているようですから、今までのドイツに対するイメージは、残念ですが、改めなければならないのかもしれない。私としては、これらが例外であることを望みたいと思います。

1 月課題は、旧東ドイツの復興に際し企業再生の失敗(?)が触れられていますが、この中で一つ、私は新事実を知りました。それは、1973 年のオイルショック後に北海の天然ガスを掘削することによりオランダには大きな助けになったということです(この恵みがまた、皮肉にもインフレや賃金上昇を招き、オランダにおける企業倒産にもつながったというのも非常に興味深いところでした)。当時は当然、このことが話題になっただろうと思いますが、当時学生だった私にはそのようなニュースを知りませんでした。現在、米国のシェールガス革命が話題になっている折から、新たなエネルギーの与える影響についても大いに興味が沸くところです。

K. K.

2013年3月21日

2013年2月 Nr. 384

今回の課題において交通騒音について興味深いことに触れられていました。交通騒音が原因となって病気になることについては特に目新しい話ではありませんが、ドイツでは交通騒音に起因する死者数が交通事故による死者数を上回るという事実があることは全く知りませんでした。自分自身の経験からもドイツでは一般に騒音には厳しいと思っていましたので、その様な事実は意外な感じを受けますし、交通事故による死者より多いというのは、深刻な問題であると思います。

騒音一般に対してより寛容と思われる日本では、交通騒音と交通事故による死者の比較をした場合、やはり前者のほうが多いのでしょうか。実感としてはそうは思えないのですが、事実を知らないだけかもしれません（私がインターネットで検索した限りでは、データはありませんでした）。しかしそうだとすると、日常的に交通騒音に晒されている人に加え、空港近隣の住民だけでなく、（交通騒音とは言えないですが）戦闘機の離着陸時の騒音に悩まされている軍基地の近隣に在住の人々にとっては、「騒音死」とも言うべき新しい問題が提起されることになると思います。

また、地方都市のさびれていく状況は、大分前から日本においても、類似した現象が問題となっています。かつて賑わったものの、現在ではシャッターを下ろし営業をしていない店舗が多く並ぶ様子を俗に「シャッター通り」や「シャッター商店街」などと称していますが、私の住んでいる地域（地方都市ではありませんが）でも、10年位前に営業していた多くの店舗が、現在では廃業しシャッターを下ろしているか、全く別の建物、例えばアパートや駐車場に建て替えられていたりします。パン屋、魚屋、肉屋、八百屋、薬局、豆腐屋、定食屋など多くの店が消えました。やはり、大型スーパーには対抗できないことが大きな要因だと思われませんが、年老いた経営者の後継者がいないということにも原因があるように感じます。

ところで、ドイツ語ではこの「シャッター通り」に相当する言い方はあるのでしょうか。

K. K.

2013年4月12日

2013年3月 Nr. 385

今回は、Nachlasspfleger (遺品整理人) という稀な職業がテーマになっています。しかしながら、私は、むしろその遺品整理人が今回、業務として扱った Gaby という女性とその母親 (Frau Gertrud) に関心を持ちました。

遺品整理人が登場するからには、家族がないのが一般的だと思いますが、彼女の母親は生きているものの、死亡した娘の遺産を相続すると、負の遺産、つまり借金も引き受けなければならぬため、相続を放棄したということでした。ここまでは理解できますが、自分が以前娘に送ったソーセージが未開封だと知らされて、相続は放棄するけれども、何と、それだけは欲しいというのですから、普通には理解しがたい行為です。元々、この親子は折り合いが悪く (夫が戦死したことも影響したのでしょうか)、それでも母親は娘が気がかりだったと見えて、時折、食品を送っていたようです。

一方、Gaby は、母親と年齢が近い女性と唯一、友人としての付き合いがあったとのことですが、一つには、彼女の中に自分の母親の姿を見ていたのかもしれませんが、私にはむしろ Badewanne を借りるために彼女を利用していったような印象を受けます。というのは、貸し手の都合もお構いなく、夜借りにきたようですから。また、アパートの上の階の男性が、郵便受けが一杯になっているとか、洗濯物が落ちているなどと親切心から彼女に連絡してあげようと、電話を掛けたり、ドアのベルを鳴らすと、うるさいから邪魔をしないで欲しいといつも言われていたということです。このように自分勝手に人からは好かれていなかった印象を受ける彼女でしたが、ペットを残しての孤独死、しかも死後 2 週間後の遺体の発見だったため、遺体の腐敗が始まっていたという最期には、同情を覚えざるを得ません。

また、遺言状に自ら希望していた埋葬方法には預金残高が不足しており、法で定められた Zwangsbeisetzung にならざるを得なかったというのも哀しい結末です。

日本でも、Gaby のような最期は、孤独死とか孤立死として、大きな問題となっておりますが、この対策に乗り出す町内会や自治体も増えているという報道も最近は聞きます。

今回の放送および課題とも、Gaby の遺体を実にリアルに描写しており、私にとっては外国語であるドイツ語ですが、その内容には衝撃を受けましたので、しばらくは忘れ得ないと思います。

K. K.

2013年5月14日

2013年4月 Nr. 386

今回は、グリム童話がテーマです。

グリム童話といえば、日本でも、私が小さかった頃から有名でしたので、大抵の子供はいずれかのグリム童話に接したことがあると思います。私は、これらを収集・編纂したグリム兄弟が実は言語研究者だったことも後年になって知りましたが、これについては日本では一般にはあまり知られていない事実と思われる。グリム童話という名前が示す通り、一般的には今もなお、グリム兄弟が書いた童話と理解されていると思います。

今回の課題を作成する前は、メルヘンは“Es war einmal...”で始まると思っていましたので、“Es war einmal...”で始まるメルヘンが全体の2分の1よりも少ないというより、むしろ3分の1に近い(214中77作品)というのは私にとっても意外でした。しかも放送で聞く事ができた3つの物語は、いずれも“Es war einmal...”ではなかったということです。と言うことは、この語句を聞くと、メルヘンが始まるとの認識されているものの、この語句がメルヘンには欠くべからざる語句ではないということも今回認識いたしました。

昨日付けの新聞にドイツ観光局と日本の大手旅行代理店によるドイツ旅行の合同広告が1ページ全面を割いて掲載されているのが目に留まりました。本年は、「グリム童話200年、ワーグナー200周年」として「メルヘン街道」(生誕の地ハーナウから終着地ブレーメン)には見所が豊富にあるということが、いくつかのグリム童話の代表作を紹介しながら記載されておりました。今回話題になっている“das Brüder-Grimm-Museum”があるKasselは広告では紹介されていませんでしたが、メルヘン街道をテーマにした旅行では訪問地として当然含まれるものとは思いますが。

K.K.